

②七千人を残し (18)「しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残しておく。」しかし、そのような中であっても主は、イスラエルの中に七千人を残してくださるというのです。つまり、イスラエルの民はアハブのもとにあって、バアル信仰の勧めや強要があったと思われませんが、この七千人の人々は残されるというのです。

③バアルにひざをかがめず (18)「これらの者はみな、バアルにひざをかがめず、バアルに口づけしなかった者である。」彼らが残される理由は、彼らの神への信仰でした。彼らは、バアル信仰に陥ることなく生きた人々だったのです。偶像神バアルにひざをかがめ、口づけする者たちは、アハブ王を頂点とする政治勢力の下にそうせざるをえなかったのでしょうか。とはいえ、イスラエルの民が受け継いできた創造主なる神への信仰は忘れ、すっかりバアルの虜になっていました。しかし、七千人の人々は、彼らへの迫害をも恐れず、勇気を奮って、堅い神信仰によって生きてきたのです。

3. エリシャの召し (19~21)

①エリシャを招き (19)「エリシャはそこを立って行って、シャファテの子エリシャを見つけた。エリシャは、十二くびきの牛を先に立て、その十二番目のくびきのそばで耕していた。エリヤが彼のところを通り過ぎて自分の外套を彼に掛けたので、」さて、エリヤはホレブの山を後にしました。向かう先は、彼がまずしなければならないと促された、エリシャのいるところでした。16 節から考えると、アベル・メホラだったでしょう。行きにベエル・シェバから 40 日 40 夜かかったのですから、それより北の地ですから、50 日ぐらいはかかったでしょう。エリヤは「主こそ神」という意味ですが、エリシャは「神は救い」という意味です。エリシャはこの時、家の仕事である農業をしていました。一つのくびきで、二頭の牛が歩調を合わせて耕地をするのですが、12くびきといえは24頭の牛がいたことになり、エリシャが耕していると、そこにエリヤがやって来て、外套をエリシャに掛けたのです。それはエリヤがエリシャを預言者へと招く合図でした。

②父と母に口づけしたあとで (20)「エリシャは牛をほうっておいて、エリヤのあとを追いかけて行って言った、『私の父と母とに口づけさせてください。それから、あなたに従って行きますから。』」エリヤは彼に言った、『行って来なさい。私があなたに何をしたいのか。』するとエリシャは、その重大性に気付いて、牛による耕しの手を止めて、エリヤの後を追ったのです。そして言ったのです。「父、母の所に行き、挨拶をしてきます。そのうえで、あなたにお従います」。エリヤは、「行きなさい、私は何も言っていないよ」と応えました。何か、キリストに従った弟子たちのことが思い出されます。

③エリヤについてゆき (21)「エリシャは引き返して来て、一くびきの牛

を取り、それを殺し、牛の道具でその肉を調理し、家族の者たちに与えてそれを食べさせた。それから、彼は立って、エリヤについて行って、彼に仕えた。」エリシャは、一くびきの牛を連れ来て屠り、肉を調理して、家族に与えてそれを食べさせました。そこで、エリシャは神の召しを証したのでしょう。その家の農業はどうなるのか、家族の経済はどうなるのかなど、心配はありますが、神が召される時には、それを誰も止めることができないともいえましょう。エリシャはエリヤに従い、預言者への道を進むことになるのです。

《結論》

今朝の聖書箇所には、エリヤがその働きを次の世代に継承していくために、主からの導きをいただいている場面ともとれます。まだその働きは続きますが、その道筋が少しずつ備えられています。15~16 節にある主の預言的なご命令についても、エリヤに促されているのですが、そのうちの二つの実現はエリシャの時代になってからになるということにも、それが裏付けられています。そして、エリヤがエリシャに出会わせられて、預言者への道へと招いていることは、それを明確に示していると言えます。

さて、私たちはエリヤがここに与えられたことにおいて、二方の篤い信仰を見るのです。そこから今朝は教えられていきたいと思えます。

その第一は、主が残してくださるという 7000 人のイスラエルの民の信仰です。アハブとイゼベル夫妻が治める国においては、偶像神バアルへの信仰を民は強いられていました。イスラエルの民が先祖から受け継いできた創造主である神への信仰は隅に追いやられていました。その中にあって、この 7000 人は「バアルにひざをかがめず、バアルに口づけをしなかった」とあります。権力者から迫害を受ける可能性が十分にあったにもかかわらず、彼らは幼い頃から教えられてきた主なる神への忠実な信仰を証したのです。「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない」(出エジプト記 20:3-4) という、十戒の 1 戒と 2 戒を彼らは心に刻んでいたのです。私たちが、この時代の世にあって生きる時にも、偶像信仰への誘惑はたくさんあります。改めて、まことの神への信仰を明らかにしていきましょう。

その第二は、エリシャがエリヤから預言者になることを促された時に、エリシャが、地上のことをすべて主にゆだねて、従っていったという信仰についてです。エリシャには家族もいました。信仰の一側面に「従う」ということがあります。そして、従う時には、「捨てる」ということが求められることがあります。ここにおいて、エリシャは家業でもある農業をしていたのです。また、彼には少なくとも、両親がいました。そこに残って、農業を続けることは、この

世の責任を果たすことでもあります。それにもかかわらずエリシャがエリヤについて行ったのは、神からの召しがあったからでありましょう。地上の家族のこと、地上の財のことなどについては、考えなければならない重大事ですが、それらをゆだねて歩む信仰が教えられているのです。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」(ルカの福音書 9:23~24) とあります。イエス・キリストが弟子たちを招かれた時のお言葉です。この者も促されて従いましたが、その結果、主は必要のすべてを満たし、守り、備えてくださったということを証できます。

主に信頼し、お委ねして、困難の多い時代、環境ではありますが、主イエス・キリストに従っていこうではありませんか。